

令和元年6月14日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02563

研究課題名(和文) 希望と遺産継承の思想 ランダウアーからブロッホに至るアナーキズムの射程

研究課題名(英文) German anarchism and its impact on Ernst Bloch's philosophy of hope and heritage

研究代表者

吉田 治代 (Yoshida, Haruyo)

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：70460011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、エルンスト・ブロッホにおける「遺産」概念、および「遺産継承」という実践について、グスタフ・ランダウアーとフーゴ・バルのアナーキズムからの影響を跡付けながら解明することを目的とする。成果として次の三点が挙げられる。1) ナショナリズム、帝国主義、資本主義、マルクス主義に対抗しながら、それらのイデオロギーによって抑圧され、忘却された過去の思想を現在へと想起するというアナーキズムの独自の歴史哲学を解明した。2) このアナーキズムを受けとったブロッホの思想は、宗教も含む思想伝統を遺産相続する「保存するユートピア」と理解できる。3) バルの「キリスト教的アナーキズム」とブロッホへの影響を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1) 歴史批判的アプローチによって、「マルクス主義」にのみ還元されないブロッホ思想の読解を進めた。2) 長らく閑却されてきたランダウアーとバルのアナーキズムについて、最新の一次/二次資料を分析してその全体像を明らかにし、またブロッホに関する研究と突き合わせることで、「遺産相続」を基とする多元主義的ユートピア思想の源泉を特定した。3) 「ダダイズム」という枠を超えて、バルの「キリスト教的アナーキズム」を解明し、そのブロッホへのインパクトを明らかにした。4) スイスからブロッホ研究者を招聘して、ブロッホの宗教思想、ひいては社会主義と宗教という、20世紀思想の重要な問題の再考を促す議論を提示した。

研究成果の概要(英文)：This study aims at exploring critical potentials of German anarchism (especially of Gustav Landauer and Hugo Ball) as well as its impact on Ernst Bloch's philosophy of hope and heritage. The study has clarified the following points: The anti-authoritarian anarchism has produced a unique philosophy of history, which aims at a recovery of what was forgotten, repressed, and excluded. Bloch accepted this dynamic philosophy and developed an inclusive idea of heritage as well as practice of inheriting. Bloch's thought of utopia can be understood as "retaining utopia". The study also gave light on Ball's "christian anarchism" and its lasting influence on Bloch.

研究分野：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：ドイツ思想 ドイツ文学 アナーキズム 社会主義 文化多元主義 文化の遺産・記憶論

1. 研究開始当初の背景

私の研究は、従来「マルクス主義哲学者」として受容されてきたエルンスト・ブロッホ (1885-1977) の思想を、厳密な文献学的調査に基づき、多元主義の観点から再検討、再評価しようとするものである。博士学位論文において、ブロッホの初期 (1910~23 年ごろ) とりわけ最初の亡命期となる 1917~19 年を中心とする第一次世界大戦期の批評を分析対象とし、以下を明らかにした。ブロッホの知的な出発点は、ロシア十月革命への賛同ではなく、とりわけドイツが責任を負う戦争への批判にあったこと、西欧とドイツという対立が先鋭化された戦時においてブロッホは、西洋の民主主義を統合的理念としたこと、しかし単にドイツを断罪するだけではなく、その歴史における民主的な思想を発掘し、同時に、西欧に発する資本主義および植民地帝国主義の問題を認識し、その点においてドイツに広まっていた近代批判に一定の正当性を認め、またその近代批判を文化の独自性の擁護として理解していた、上記のような、戦争の経験をとおして生まれたのが「多元的宇宙」というヴィジョンであり、それは、西洋近代、とりわけフランス革命の理念を普遍的理念としつつも、様々な「非同時代的」諸文化が共存する世界を志向するものであった。

その後も、ブロッホの思想を多元主義から再検討するという研究の全体構想に沿って、「ユートピア」「希望」といった、従来は一義的にマルクス主義的に解釈されてきたブロッホ哲学の鍵概念の再検討に取り組んできた。本研究で焦点を当てる「遺産」もそのような鍵概念の一つである。「遺産」(Erbe, Erbschaft)とは、ブロッホがナチスドイツとの対決を迫られた 1930 年代になって前面に現れる概念である。『この時代の遺産』(1934 年)におけるブロッホの言によれば、それは、正統マルクス主義が顧みることのなかった、そしてナチズムに取り込まれようとしている後期資本主義の文化を、来るべき社会主義へと受け継ごうとするものである。ブロッホに従って、先行研究においても、彼のいう遺産、また受け継ぐ術とは、正統マルクス主義 (共産党) を批判しつつも、マルクス主義の枠内にとどまる思考とみなされてきた。しかし、ナチズムに取り込まれる文化の奪還を目指す主張には、ブロッホなりの「愛国」が織り込まれているとみるべきである。事実、第一次大戦時、亡命者ブロッホは「パトリオット」を自認していた。プロイセン・ドイツの、非民主的で軍国主義的ナショナリズムに対して、ドイツ史の中のオルタナティブな思想伝統の発掘を行っていたという、博士論文で解明した事実を踏まえ、平成 23-25 年度の科学研究費プロジェクトにおいて、ブロッホの遺産思想、そして遺産相続の実践は、既に 1914 年に始まるドイツの継続的な危機に直面するなかで、霸権的 / 排他的ではないドイツを希求し、そのような遺産を救出するという愛国の試みとして捉え直すことができるという成果を得た。

このように、1910 年代からのテキストを再検討してみてもあらためて注目すべきは、(従来の研究で焦点化されてきたように) ブロッホが、単に表現主義など、いわゆる後期資本主義文化や芸術だけではなく、ドイツにおける自由や民主主義の思想伝統、近世の農民戦争や異端キリスト教の系譜、さらにロマン主義など、多様な思想伝統を「この時代の遺産」として救おうとしたという事実である。この問題に取り組むなかで、初期ブロッホに大きな影響を与えたと思われる人物としてグスタフ・ランダウアーが浮上してきた。アナーキストとして、マルクス主義の本流から逸れた位置に立っていたランダウアーは、1907 年に独自のユートピア論を発表したことから、従来からもブロッホへの影響が指摘されてきたが、概して「(異端的) 左翼」という枠内で議論されてきた。しかし第一次大戦の反対派としてランダウアーもまた、ドイツというネイションの思想的遺産を救出するという課題に取り組んでいた。より良きドイツと世界という未来を希求すること、そのために忘却された過去の思想伝統を掘り起こしそれを遺産とすること、ブロッホの言によれば「希望すること、遺産相続すること」を、ランダウアーはブロッホに先駆けて試みていたと思われる。博士論文では、ランダウアーのアナーキズム的社会主義がブロッホに影響を与えたことを指摘したものの、資料的制約もあり、その思想について十分に論議できなかった。また同じく博士論文で、亡命時代のブロッホの良き同志であったフーゴ・バルについても短く言及したものの、バルとアナーキズムの関係、さらにアナーキストとしてのバルがブロッホに与えた影響についても十分に論じられなかった。(なお、後述するように、バルの重要性を認識できるようになったのは、本研究を開始して以降であった。) 本研究は、ランダウアーのみならずバルまで視野に入れつつ、20 世紀初頭ドイツのアナーキズムがいかなる思想であったのか、またブロッホにどのようなインパクトを与えたのか、という問いから出発したものである。

2. 研究の目的

本研究は、ブロッホを多元主義の観点から読み直すという私の研究の枠組みにおいて、1910 年代から 30 年代までのブロッホにおける「遺産」概念、および「遺産継承」という実践について、ランダウアーやバルのアナーキズムからの影響を跡付けながら解明することを目的とする。ブロッホの多元主義とは、第一次大戦という未曾有の戦争を経験するなかで、民主主義、自由と平等を掲げるフランス革命の理念をドイツにとっても普遍的な遺産としつつ、同時に、ドイツの歴史の中に生成してきた様々な思想を遺産として引き継ごうとする包括的な遺産継承の実

践に裏打ちされた思想であり、それが、ナチズムに対する抵抗のベースとなったというのが、本研究の仮説である。「マルクス主義者によるナショナリズム(ナチズム)との対決」という従来の図式には収まらない、包括的な遺産思想/実践の解明には、左派に属しつつも、マルクス主義の枠組みに収まらない、アナキズム思想の検討が必要である。本研究では、20世紀前半のドイツという危機の時代にあって、変革を目指す未来への志向が、過去思想伝統の想起と再生への志向と結びついた独自の思想としてアナキズムを捉え直し、それが、プロッホの多元主義の核となる 希望と遺産継承の思想 へとつながることを明らかにする。

3. 研究の方法

1) ドイツのアナキズム研究

19世紀末から20世紀初頭にかけて、主にランダウアーを中心としてアナキズムがドイツにも興ったが、ランダウアーが落命したバイエルン革命後に早くも退潮した。ランダウアーや(表現主義者でもあった)エーリヒ・ミュゼムといった個別作家研究はあるものの、一般的に、社会主義/左派思想の関心の低下ともあいまって、ドイツにおいても忘れられた思想伝統であった。フーゴ・バルについても、ほぼ、ダダイズムとの関連で論じられるのみであった。しかし2000年代に入り、ランダウアーについては、注釈付きの選集が、またバルについても、歴史批判版全集が刊行され始めた。特に、バルに関する研究文献の数は飛躍的に増えつつある。本研究は、まず、ドイツにおいて整備されつつある一次文献、および二次文献について収集し分析を行う。

先駆者としてのランダウアー:1907年に出版された『革命』は、左派の立場に立ちながらも、直線的・単線的な進歩史観を提示したのではない。このアナキズムの歴史哲学を、危機においてヨーロッパの歴史を振り返る、過去の思想伝統の想起と再生の理論として読み直す。また、1909-1915年に彼が刊行した雑誌『社会主義者』を中心とするテクストを取り上げ、資本主義のみならず、ドイツ帝国とその戦争、ナショナリズム、西洋帝国主義、さらに正統マルクス主義にも抗して重層的な戦線を張り、人類の多様な思想伝統を想起し包摂していく言説空間としてアナキズムを捉え直し、バル、プロッホに至る射程を検証する。

バルのアナキズム:2000年代になって初めて公刊されたバクーニン論(1917年)などを手がかりに、第一次大戦時のバルにおけるアナキズム受容を跡付ける。19世紀のバクーニンのみならず、メレシコフスキーなど、バルと同時代のロシアのアナキストからの影響を検証し、リベルタンな伝統と、世紀転換期特有の宗教性が結びついた、独自のキリスト教のアナキズムを解明する。

2) プロッホとアナキズム:ユートピア論に関するランダウアーからの影響を別として、アナキズムとの連関については、プロッホ研究において十分に光を当てられることはなかった。本研究では、バルの全集を手がかりに、スイス亡命期に密接な関係にあった二人の交流を明るみにし、若きプロッホにおけるアナキズムのインパクトを解明する。また、マルクス主義を受け入れていくヴァイマル期の著作について、アナキズムとの切断ではなく、その連続性という観点から再検討する。ランダウアー的な 包括的遺産 の思想、バルの「キリスト教のアナキズム」の立場から、進歩主義的遺産のみに固執する立場(正統/政党マルクス主義)と民族の遺産のみを排他的に主張する立場を相対化し歴史化する批判的視座において、プロッホにおけるアナキズム的モーメントが見出されるといふ新解釈を提示する。

4. 研究成果

研究期間中、二度にわたりドイツでの調査および研究者との意見交換を行い、最終年度には、スイス人のプロッホ研究者を日本に招聘し講演会を行った。業績としては、雑誌論文4本、図書2件、学会発表2本が挙げられる。以下、主要な成果をまとめる。

1) ドイツでの調査とドイツ語圏研究者との意見交換

初年度には、夏期休暇を利用し、ベルリンの国立図書館で資料収集・調査を行うと同時に、ランダウアー研究者のCh.ホルステ氏、およびプロッホも含めた近現代ドイツ思想の研究者であるR.ファーバー氏と、プロッホやランダウアーの思想や、その現在の受容状況などについて意見交換を行った。こうした問題関連でフーゴ・バルの重要性を指摘され、バルに関する最新の研究状況についても教示いただいたことで、本研究においてバルに本格的に取り組む必要性を認識できた。二年目にはミュンヘンの国立図書館で、主にバルとロシアのアナキズムに関する資料収集・調査を行い、またスイス人のプロッホ研究者のB.ディーチ氏をチューリヒにたずね、プロッホやバルに関する意見交換を行った。

2) 論文「黙示録、ユートピア、遺産」

プロッホの思想をめぐっては、ユダヤ・キリスト教の黙示録的終末論をベースにした、宗教的に刻印された特異なマルクス主義、もしくは、無階級社会というユートピアを希求する「黙

示録的精神」とする解釈が根強く存在する。そして20世紀末には、ブロッホが対峙したはずのナチズムと同様に、20世紀のカタストロフを招来した「哲学的過激主義」として断罪されるに至った。しかし参照すべきは、クラカウアーの議論である。1920年代初頭に彼はブロッホの「宗教的共産主義」を批判したものの、親交を深めるにつれ彼のブロッホ評価は変化し、後年、友人の思想について「保存するユートピア」という定式を残している。本論文は、ここに「遺産」のモチーフを認める。「保存するユートピア」という複合的思考を解明すべく、本論文では、第一次大戦への批判から1930年代のナチズムとの対決に至る思考のプロセスを、「ライヒ」ないし「第三のライヒ」という、従来はブロッホの「宗教的」マルクス主義を論じるなかで取り上げられてきた概念に注目して再構成する。第一部では、第一次大戦前夜から1920年までの論考を分析対象とした。『ユートピアの精神』(1918年)では、悪しき現実を超えた彼岸を夢想する、悪しき世の終わりとなつた世界、「第三のライヒ」を求めるといった宗教的、黙示録的思考が認められる。しかし第一次大戦のさなかに執筆された本書には、神なき世界の空虚を埋めようとするドイツの「黙示録的ナショナリズム」への醒めたイロニーと批判がある。スイスに亡命しドイツ批判の論陣を張ったブロッホの関心は、忘却のなかに埋もれた、自由や民主を求める古いライヒの思想遺産を想起し、「いま」に再生させることである。この背景にあるのは、若きブロッホが吸収したランダウアーの歴史哲学である。彼が先駆的に示したのは、人類のチャンスは、「すべての思考され、生きられたユートピア」を「想起すること」によって、新たな生の形態を作り出すことができるかどうかにかかっている、とする考えである。その都度の現在において忘却されたものを思い出し、過去の可能性を救おうとするのだ。ミュンツァーの農民戦争など、忘れられた伝統を、現在の闘いのために見直す、「変革のために文化を読み直す」という、遺産相続のモチーフ/実践と結びついたユートピア思想は、ブロッホが第一次大戦時ドイツの敗北を受けとめる中で生成した。また1920年の論考からは、「第三のライヒ」という黙示録ヴィジョンもまた、受け継がれるべき人類の遺産の一つとみなされていることが明らかとなった。

第二部では、「第三のライヒ」を占有したナチス第三帝国に対するブロッホの批判を取り上げた。ナチスが、「第三のライヒ」を、「アルカイックでゲルマン的な」「民衆の深部」から発する古い夢として占拠したのに対し、ブロッホは、このヴィジョンの歴史的系譜の記述に専念する。絶え間ない読み直しの試みそのものを可視化し、様々な構築の歴史的地層を露にしようとするのがブロッホの方法であった。ナチスへの抵抗の過程で、ソヴィエトにユートピアを見るところに過ちに陥ったとはいえ、第一次大戦から第二次大戦に至るドイツの「黙示録的ナショナリズム」に対して、「メタ宗教的な知と良心」を保ったブロッホの姿勢は再評価に値する。そしてこの過程で、宗教をも遺産に組み込むという(後に「遺産の中の宗教」と定式化される)包括的な希望と遺産の思想が生まれたのである。

3) 発表「フーゴ・バルの キリスト教アナーキズム」

ブロッホはスイス亡命期の著作において、自らの立場を「社会アナーキズム的」と位置づけていることから、若きブロッホのアナーキズム的志向は明らかである。しかし重要なのは、スイス時代の同志とも言うべきフーゴ・バルを「キリスト教的バクーニスト」として評価していること、すなわち、アナーキズムを「キリスト教」と結びつけていることだろう。一般的には、バクーニンのアナーキズムは「無神論」と結びつき、「キリスト教的バクーニズム」という概念は、内に矛盾を孕んでいるように思われる。しかしこのような矛盾を秘めたバルを評価する姿勢においてこそ、単に無神論的左翼として割り切れない思考の原点があるのではない。本発表ではこうした想定のもと、バルの思想を明らかにすることに専念した。まず、2010年によく初公刊された『バクーニン語録』(1917)を中心に、第一次大戦初期よりバルが集中的に受容したロシアのアナーキズムを再構成した。19世紀ロシアの革命家としてバクーニンには、ロシアの遅れた封建的専制国家と教会との癒着への批判および産業資本主義への批判がある。マルクスと距離をとりつつも、19世紀の左派として無神論の立場を堅持しているように見える。しかし20世紀の初頭においてバルは、メレジコフスキーなど、同時代のロシアのアナーキストを、バクーニンと同時的に受容している。この同時代人に認められるのは、ツァーリズムを打破する革命を希求するアナーキズムとともに、西洋の「信仰を失った俗物」社会への先鋭化した批判であり、そこから生じる「宗教性」、すなわち「教会外的宗教性」である。そしてこうした立場から、「ロシア的霊性」を、ツァー打倒のために闘う革命家(通常は無神論者とみなされる)に認めるといった特異な見解を提示している。そしてバルが提示するバクーニン像もまた、解放を求める革命のなかに「聖性」を見るような宗教的な革命家の姿となる。遅れたロシアのみならず、遅れたドイツにも批判を浴びせたバクーニンにならぬ、バルもまた、『ドイツ知識人批判』(1919)において、プロテスタンティズムに支えられたプロイセンの神政政治を批判する。同時に、ドイツの戦争神学によって否定された、啓蒙的、解放的革命運動のなかに、本来のキリスト教精神をみてとり、戦後の新たな世界のために、「宗教的な知識人のインターナショナル」を希求するに至り、さらにこのキリスト教復興への希求は、カトリシズムへの回帰へと彼を導いた。宗教(とりわけキリスト教)の遺産ということを考え、後年には「キリスト教の中の無神論」というアイデアを打ち出すブロッホのパラドキシカルにしてアクロバティックな思想は、第一次大戦時に、ブロッホがこの特異な友人からのインパクトを受け止めることで生まれたのである。

4) 発表: *Unruhe der Geschichte*. Aktualität und Utopie bei Hugo Ball und Ernst Bloch

北米の日本学者 H.ハルトゥーニアンは、著書『歴史の不穏』において、戦間期の日独の知識人、例えばペンヤミン、クラカウアー、ブロッホ、戸坂潤にみられる、歴史や時間についての省察を分析している。資本主義が世界的に広がると同時に、それを克服せんとするマルクス主義、さらにファシズムが台頭する危機的状況において、近代的な進歩史観、歴史の連続性といった観念に対して彼らが行った批判的省察を取り上げる中で、「非同時代的なるものの同時性」などの概念を打ち出し、「現在」という時間の有り様について思索を行ったブロッホの再評価を試みていることは注目に値する。本発表では、ハルトゥーニアンの議論に接続しつつ、しかしむしろ第一次大戦期という「前史」に光を当てる。ブロッホのスイス亡命時代(1917-19)の同志フーゴ・バルが行った「歴史の読み直し=書き直し」の実践を明らかにし、そのブロッホへのインパクトについて考察する。

バルは1917年から1919年にかけてドイツ人亡命者のメディア『自由新聞』を中心に政治的ジャーナリストとして活動し、その評論活動をベースにした書物『ドイツ知識人批判』(1919)を発表した。従来は、連合国寄りの立場からのドイツ批判であり、政治的な「パンフレット」とみなされてきた。しかしバル自身は「出来事のアイロニーは、パンフレットよりも緊急で生産的な方法を要求する」と述べている。本発表では、バルが直面した「出来事のアイロニー」とは、19世紀を通して主に西欧諸国で形成されてきた自由主義的/産業主義的近代の「超克」を目指したドイツのナショナリズム、そしてマルクス主義の教説がその超克に失敗したとの認識を指すと捉える。戦前にはニーチェの影響を受け、近代からのロマン主義的脱出を夢見たバルからすれば、戦争とロシア革命の現実の推移は幻滅をもたらすものであった。バルの方法とは、「悪しき西洋文明を救済する」というドイツのナショナリズムが宗教とモラルの破壊をもたらしたこと、マルクスらの社会主義が、プロイセン国家に敵対しつつも、その権威主義や集権主義を共有し、「独裁」に訴えることで「解放」の理念から遠ざかったことを、ルターからカント、ニーチェやマルクスの読解を通じて暴露することである。同時に、ナショナリズム的、マルクス主義的歴史記述が忘却、抑圧してきた歴史、例えば農民戦争の指導者ミュンツァー、ロマン主義哲学者バダー、キリスト教的社会主義者ヴァイトリングなどを救い出すことである。そしてヨーロッパ近代を、「世俗化」テーゼに反して、「キリスト教ルネサンス」のプロセスとして読み直し、これらのドイツ人をそれに組み込むことで、ドイツとヨーロッパの絆を修復し、戦後のドイツの再生へと期待をかけている。ミュンツァーの農民戦争のような、過去に実現できなかったヴィジョンを現在の闘いのために忘却から呼び起こすというバルの「不穏な」歴史記述を、ブロッホは高く評価していた。

戦後、ルカーチの新しいマルクス主義哲学を通してブロッホはアナーキズム的な反マルクス主義を脱し、マルクスを新たに発見していく。しかし常に現在のアクチュアリティに根ざす姿勢において、そしてまさにバル同様に「過去の思想の実現」を目指す若きマルクスをこそ評価する姿勢において、ブロッホにおけるバルの持続的なインパクトが確認できる。

5) ブロッホ研究者 B.ディーチ氏の日本招聘

ブロッホ最晩年の、チュービンゲン時代の弟子であり、ブロッホ研究者であるスイス人のディーチ氏を日本に招聘し、東京と新潟で講演会を開催した。特に、「宗教を再考する—エルンスト・ブロッホ宗教哲学の遺産」というタイトルで行われた東京での講演会が本プロジェクトと関連する。本講演においてディーチ氏は、とりわけ 1) 宗教からの遺産相続は、宗教的伝統を「メタ宗教」へと転換 (transformieren) することである、2) ブロッホの宗教思想を貫くのは、「ラディカルな此岸化」であり、「内在的な超越」である、3) ブロッホの言う宗教の此岸化は、レーヴィットの言うような「世俗化」とは異なる。宗教の遺産が意図するのは、宗教の「世俗化」ではなく、宗教のもつユートピア的内実の実現である、といったテーゼが説得的に提示された。とりわけ、「世俗化」のテーゼをもってマルクス主義を含む近代の歴史哲学を読解しようとしたレーヴィットに対するブロッホの批判という論点は、これまでの研究で見落とされてきた点であり、今後さらなる検証を行うべきであろう。なお、この講演会は、久保田浩氏が代表の科学研究費補助金(基盤B)「宗教思想研究の基礎概念再考 mysticism 及び関連概念の理論的・系譜学的研究」との共催である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 4件)

1. Haruyo Yoshida: *Unruhe der Geschichte*. Aktualität und Utopie bei Hugo Ball und Ernst Bloch, in: Literaturstraße, Bd. 19/Heft 1. (査読あり、印刷中)

2. Haruyo Yoshida: „Das utopische Deutschland“ – Anfänge des Utopie- und Erbe-Denkens bei Ernst Bloch, in: Germanistik zwischen Tradition und Innovation [Akten des XIII. Internationalen Germanistenkongresses Shanghai 2015], Bd. 8, Frankfurt a. M. 2017, S. 431-435. (査読なし)

3. 吉田治代「黙示録、ユートピア、遺産—プロッホにおける『(第三の)ライヒ』論」、『ドイツ文学』154号、2017年3月、82-102頁(査読あり)

4. Haruyo Yoshida: Walter Rupprechter: *Passagen – Studien zum Kulturaustausch zwischen Japan und dem Westen*, in: *Neue Beiträge zur Germanistik Bd.15/Heft 1*, 2016, S.169-174. (書評論文、依頼/査読あり)

〔学会発表〕(計 2 件)

1. Haruyo Yoshida: *Unruhe der Geschichte. Aktualität und Utopie bei Hugo Ball und Ernst Bloch.*

Internationales Literaturstraße-Symposium in Tübingen、2018年10月5日、チュービンゲン大学

2. 吉田治代「フーゴ・バルの キリスト教アナキズム」、宗教思想研究基礎概念研究会、2018年3月3日、立教大学(東京)

〔図書〕(計 2 件)

1. (共著)新野守弘ほか編『知ってほしい国ドイツ』(高文研)2017年。担当部分:吉田治代「ヴァイマルという『戦後』を生きる—クラカウアーにおける第一次世界大戦の経験と記憶」] 54-59頁。

2. (共著)Teruaki Takahashi (Hg.): *Japanisch-deutsche Diskurse zu deutschen Wissenschafts- und Kulturphänomenen*, Wilhelm Fink 2016. 分担部分: Haruyo Yoshida: *Nüchterne Distanzierung? Japan und Europa bei Karl Löwith*, S. 151-162.